

あとがき

十二月二十三日付の朝日新聞朝刊で段々社代表の坂井正子さんが次のようなことを語っておられる。「インターネットの普及で、アジア関連の情報は入手しやすくなった。でも、アジアの内面世界や人々の心のひだを手に取るようにわかるのは、小説が一番だと思う。」(二十一面、家庭)

『インド文学』が創刊され、ウルドゥーとヒンディーの小説やエッセイ、詩などを主にインドの現代文学が翻訳紹介されるようになってから今年で三十三年になる。『インド文学』はその後『ウルドゥー文学』と名を改めて発行が続いているが、ひとりウルドゥーに限らず、インドの色々な言語による文学や文献を紹介しようとする地道な努力と活動もいくつも行われていることは、言うまでもない。嬉しいことに今年の後半はそのうち二つの成果を手にすることができた。一つは七月に発行されたマハーラーシュトラ研究会による『マハーラーシュトラ』である。

本誌の創刊は一九七八年であったが、その後十八年間の休刊期間を経て九八年より再刊され今回の七号に至ったことは、誠に同慶の至りである。内容的にも学術誌としての充実ぶりには目を見張らされる。二つ目は十月に出されたインド児童文学の会による『チャンパの花』第三号で、本誌も多彩な翻訳者と収録内容の豊富さに、編集者のご努力が表れている。

こうした翻訳紹介活動を着実に続けていくうちに作品が蓄積され、やがて一冊の単行本として出版されるといふ展望が開けてくるわけである。いずれにせよ、インド文学研究の裾野が次々と広がっていくのは私にとって大きな励みと刺激になっている。九月に石田英明さんの『実用マラーティー語会話』が大学書林から出版された。『実用ヒンディー語会話』に続くもので、口火を切った『実用ウルドゥー語会話』から数えて三冊目になる。今後パンジャービー、ベンガリーと具体化しやすいところから続いていくことを願っている。

鈴木 斌